西照寺寺報「さいしょう」 第45号
2023年10月5日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座　00780-8-8185 西照寺
西照寺ホームページ　http://nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月六日（月）午後二時（逮夜）～

七日（火）午前九時半（満日中）～

布教使　林　史樹　師　高岡市伏木要願寺住職

※今年度お斎（御膳）はありません。
また、六日晩のお初夜はありません

西谷山　西照寺

正信偈のはなし 第十二話

一切善悪凡夫人　聞信如来弘誓願
（一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば）

仏言広大勝解者　是人名分陀利華
（仏、広大勝解のひととのたまへり。この人を分陀利華と名づく）

弥陀仏本願念仏　邪見驕慢悪衆生
（弥陀仏の本願念仏は、邪見・驕慢の悪衆生）

信楽受持甚以難　難中之難無過斯
（信楽受持することはなはだもって難し、難のなかの難これに過ぎたるはなし）

（中面に続く）

「世間で善人だ、悪人だといわれる一切の人々は、阿弥陀如来の本願（弘誓願=第十八願）を聞いて信ずれば、お釈迦様は、広大な智慧を得た者（広大勝解者）とほめたたえ、この念仏の信心の人を泥沼に美しく咲く白蓮華だとたたえられる。阿弥陀仏の本願による念仏の法（教え）は、誤ったよこしまな考えをもち、おごりたかぶる人々には、信じること（信楽受持）は、はなはだむずかしい、難の中の難で、これ以上に過ぎるむずかしいことはない（無過斯）」

悪人正機

悪人正機は、浄土真宗の根幹を成す大変重要な教えです。悪人こそが、阿弥陀様の救いの目当て(正機)であり、すべての悪人を救うためにはたらいてくださっている。如来の願い(本願)に呼び覚まされ、自らの「悪」に目覚めさせられた者こそ、如来に救われるしかない私であったことが明らかに覚知されるのです。

この悪人正機でいう「悪」と「社会的悪、犯罪、倫理道徳的悪」と、親鸞様在世の当時から非常に混同されて誤解されてきました。そこで、どんな悪いことをしても阿弥陀様は救ってくださるのだからと容認する「本願ぼこり」(阿弥陀様は絶対であるから何をしても救われる）や「造悪無碍」（悪いことをしても差し支えない）として受け取られることもありました。これに対して親鸞様は、『くすりあればとて毒をこのむべからず』(歎異抄）と厳しくいましめられています。

それでは、悪人正機の「悪」とは、どういうことをいっているのでしょうか。

この正信偈の一段では『一切善悪凡夫人』(世間で善人だ、悪人だといわれる一切の人々は）と言われています。世の中の善人だ、悪人だといわれる評価とは関係なく、一切の人々はと言っています。つまり、一切の人間が抱えている問題を表現しているのが、悪人正機の「悪」ではないかと思います。

それはどんな問題なのか。

「いのち」への目覚め

普通これは自分の命、私の所有物である。「私が生きている」と思っている私がいます。そうすると私の理性が判断の基準となり、その理性にかない、私の願いや思いが満たされたことが幸せだ、喜びだという日暮らしになります。

ところが、人間は必ず死なねばなりませんから、最後は最大の不幸のどん底で終わるということになります。

これでいいのだろうか。このことが釈尊の出家の動機、「老・病・死に思い至ったから」といわれています。なぜ老病死に苦悩し、恐れる私がいるのか。そこにはどんな意味とはたらきがあるのかということです。

六年の苦行の末、釈尊は「いのち」の真実に目覚めます。よく、六年の苦行の結果悟ったと思われがちですが、六年の苦行で悟りに至ることはできなかった。全く無駄であったとお捨てになったのです。雑阿含経（苦行経）にはそのように書かれています。スジャータの乳粥の施与で元気を取り戻した釈尊は、菩提樹のもと瞑想に入り悟られ、仏陀（目覚めた者）と成られます。

釈尊の成道は、骨皮のガレガレの姿で描かれていますが、これは苦行の結果悟りを開かれたというのではなくて、苦行を捨て、間なく悟りを開かれたから、ああいう姿として描かれていると思います。

それでは、一体何に目覚め悟られたのでしょうか。

それは、命は自分のものではないという「いのち」の事実です。あらゆる命は、別々に単独で存在しているものはない。相互に依存し、「相依相関」の関係性の中で成り立っている。釈尊はこれを「縁起の道理」（因縁生起）と教えてくださっています。あらゆる命は、無量無数の因と縁（条件）が仮に集まって生起（成立）している。「因縁仮和合」であり、縁起的存在であるというのです。そこでは、皆がどこかで関係し合い、つながり一つになっている。宇宙が一つであるような、いのちの根源的世界である。

親鸞様は、『一切の有情（生きとし生けるもの）はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり』（歎異抄）といただかれています。

ですが、これは「私の命だ」「私が生きている」という私がいます。かといって、自分でつくったものは何一つありません。一方的に与えられた、無量無数のものや、はたらきによって支えられ「生かされている私」であったということが命の真実です。

縁起の道理からいうと「命」は因と縁という条件によって変わっていきます。単に消滅変化し続けるだけです。老も病も死も単なる生命現象の変化に過ぎませんから、どの状態も百点満点であるはずです。

（裏面に続く）

（中面からの続き）

ところが、自我の煩悩でしか受け取れない私は、「苦」を感ぜずにはおれません。

釈尊は、その「苦」の背景には、「いのちの真実」に目覚め、その願いに生きるように。そこにこそ真の幸福と喜び、生死を超えていく道があるとの、「いのちの真実」からの「はたらき」があると悟られました。

しかし、このように聞かせていただいても、私には中々そのようには受け取れません。

その私のために、お釈迦様は、いのちの根源的な世界を悟った阿弥陀如来という仏様がおいでになると教えてくださいました。阿弥陀とは、梵語の「アミターバ（無量光〈空間的に無限である〉）、アミターユス（無量寿〈時間的に無限である〉）」の合わさった言葉で、アミダと音写（梵語の発音を残すために、その同じ発音をする漢字をあてはめた）されたものです。宇宙が一つであるような、いのちの根源的世界である。そのことを佛教では「如（一つ）」と現しているように私は受け止めています。その世界から私に分かるように姿をあらわし来てくださった方を如来様といいます。

阿弥陀如来は、すべてのものを救いたい、いのちの真実に目覚めさせたいと願い（本願）を起こされ、そのはたらきを念仏（南無阿弥陀仏）に全て込めて、すでに私に届けてくださっていました。親鸞様は『南無の言は帰命なり。（略）帰命は本願招喚の勅命なり』（教行信証 行巻）といただいておられます。帰命といいますと、私の側の仏に対する帰依の態度、感情のように思います。しかし、親鸞様は、いのちの根源的世界からの、「いのちの真実」に目覚めよ、気づけよと、如来様からの私に対する一方的なはたらき、よび声と受け取っておられます。

その念仏に込められた本願、いのちの根源的な世界では、皆がどこかでつながっているから、自分のことよりも他者のために生きるあなたになってほしい。その願いを聞かせていただけばいただくほど、自我煩悩から抜け出すことができない私に気づかされていきます。そのことを佛教では「悪」の自覚と表現しています。

「邪見・驕慢の悪衆生」とは私のことであったと頷かずにはおれません。

悪人が正機だというのは、自分の根源的な問題（悪）に気づかなければ、それからの解放へとは繋がっていかないからです。合掌

（文責前住職）